カリブ海のイスパニョーラ島での 3 年

1. イスパニョーラ島素描

カリブ海の西インド諸島中部に位置するイスパニョーラ島は、西側のキューバとジャマイカ、東側のプエルトリコの間にあり、諸島中キューバに次ぐ第 2 の面積を持つ島である。東側3分の2をドミニカ共和国（以下、「ドミニカ」という）が、西側3分の1をハイチが占める。ドミニカの協力を得たハイチの農業分野中堅技術者の能力強化を目的とする南南協力プロジェクト「対ハイチ農業技術研修コースプロジェクト」に、2010 年 10 月から 3 年間、途中半年ほど渡航できない期間があったが、従事した。同じ島にあっても国情、経済開発水準、生活の実情に相異がある東西の二つの国と、JICA が支援する三角協力でもあるこの技術協力プロジェクトについて紹介したい。

サンディエゴのココヤシ売り 2011 年

1492 年、コロンブスは第 1 回目の航海でキューバ島の北側バハマ諸島のグアナハニ（サンサルバドル）島に西インド諸島での第一歩を印し、その後、キューバ島、イスパニョーラ島などに上陸した。1493 年第 2 回目の航海の際には、ドミニカのケープ・イサベルの近くに、新世界におけるヨーロッパ人の最初の植民地であるイサベル植民地を築いた。ドミニカには「アメリカ大陸で最初の」あるいは「最古の」という語のつく遺跡や建造物が多く残る。首都サントドミンゴはヨーロッパ人が西半球に建設した現存する最古の都市であり、サントドミンゴ大学は南北アメリカ大陸でもっとも古い大学である。

ハイチの街並み 2011 年

イスパニョーラ島の先住民は、スペインによる植民地統治下の 16 世紀には滅亡してしまい、その後アフリカからの黒人奴隷が先住民労働者にとってかわった。18 世紀末に全島がフランス領になり、1804 年に独立して、ハイチという最初の黒人共和国となった。19 世紀に入って東側部分が再びスペイン領になり、1844 年にハイチから独立してドミニカ共和国となった。

ハイチの公用語はフランス語とクレオール語である。クレオール語はフランス語に英語やスペイン語からの借用語と西アフリカの言葉が混淆してできた言語で、人口の大半が話している。一方、フランス語は公的機関やビジネス、教育の場

で使用されているが、母語として日常的に話すのは2%程度のエリート層とされる。住民の約 95%が黒人、5%ほどが主としてフランス系と黒人の混血であるムラートである。ムラートがエリート層の約半分を占める。1990 年代の軍事政権への国際的制裁、長年にわたる政情不安、度重なる自然災害などのために、ハイチは西半球の最貧国になっている。多くのハイチ人がドミニカへ出稼ぎに出て、道路工事、建設工事、露天商、門番など、ドミニカ人が好まない労働に就いている。農村部ではサトウキビやコーヒーの収穫・出荷労働に従事することが多い。一方、ドミニカの公用語はスペイン語であり、階層に関係なくだれもがスペイン語を話す。住民の 70%以上がスペイン系とアフリカ系との混血である。長期政権下で政治が安定し、順調な経済成長を遂げている。アメリカへの出稼ぎが経済の一端を担い、家族や親戚の誰かがアメリカに居るというドミニカ人が多い。

島の東西の統治にたびたびの交代があり、ハイチの政治の安定に時間がかかって両国の経済、文化、民情にかなりの相異が生じている。

2. ハイチの困苦

2000 年代になってハイチの政情不安は一層深まり、04 年の反政府武装勢力の蜂起に対して、治安維持のために多国籍暫定軍、次いで国連ハイチ安定化ミッション（PKO）が展開し、以後 PKO は活動期限の延長を繰り返している。これに自然災害の打撃が加わった。08 年に 4 つのハリケーンが連続して通過し、多数の死者と多大な物的被害を出し、10 年 1 月にはハイチ地震が起きて 30 万人を超す死者と都市部の壊滅的な破壊という被害を蒙った。

首都のほとんどの公園は被災者のテント　2011 年

震災の死者は都市部の 2 階以上の建物に住んでいた人に多かった。素焼きのレンガを積み上げた、耐震構造になっていない建物の、床と天井が重なって潰れて亡くなっている。農村の木造家屋倒壊の被害は小さくて済んだ。同規模の地震が経済水準の高いドミニカで起きても被害はより小さかったと推測できる。

イスパニョーラ島がハリケーンの豪雨に見舞われると、ハイチでは各地で災害が発生し、多くの死者が報告される。一方、隣接したドミニカではそれほど大きな被害が生じていない。これは、ハイチの長年にわたる森林減少や農地土壌の荒廃に一因があると言える。植生が失われ裸地化した傾斜地に大雨が降ると、雨水が土中に浸透しないため地下水にならず、表流水となって表土を侵食しながら一気に流れて土砂災害を引き起こす。下流では河川水が氾濫して洪水になる。表土を失った耕地の生産性は落ち、土砂や洪水は道路や橋梁などのインフラをも破壊する。この国の人口の三分の二近くが最貧層に属し、その大部分が山岳地帯で小規模農業を営む。主な農産物として、コーヒー、サトウキビ、サイザル麻、綿花が挙げられ、輸出の

地震により崩れた大統領府　2011 年

中心はコーヒーであるが、農民の 8 割以上が自給できない状況に置かれている。

震災後に策定された復興計画に、食料安全保障の観点から農業生産の向上、そのための技術向上と人材育成およびインフラ整備が盛り込まれ、農業技術者を育成し、農産物生産量増加を目指すとしている。こうした経緯を背景に、中山間地の小規模農家の農産物生産高を増大させることをプロジェクト目標とする「対ハイチ農業技術研修コースプロジェクト」は、地震の影響で遅れたが、2010 年 10 月に開始された。日本が農業分野の技術協力を長期間にわたって実施してきた、隣国ドミニカでの技術研修の実施を主体とするプロジェクトである。地理的条件、気象、土壌、植生などに共通性が高く、農業関連技術協力プロジェクトの成果を活用しようとするものである。

このプロジェクトは、ドミニカでの研修コース実施とハイチでのフォローアップの2つの大きな柱から成り立ち、ハイチで最も貧しい中央県を対象地域とし、持続可能な農業の視点を重視した。研修コースは合計 6 回、ドミニカの ISA 大学（旧高等農業大学）で実施された。ハイチで研修を実施するには治安の問題と講師や実施場所の確保が難しいうえに、首都に震災の傷跡が残って研修プロジェクトを実施する余裕がなかった。ドミニカでの研修後は、計 12 回にわたり、研修講師を含むプロジェクト実施チームがハイチの対象地域の農村を訪ねて、現地セミナーや講習会などのフォローアップ研修が実施されている。研修対象はハイチの農業普及員であり、小規模農家対象の農業技術指導や生活改善の支援に関わる政府機関や様々な NGO に所属する普及員を研修に招いた。研修講師は主に ISA 大学の教員であるが、農業省や米州農業協力機構からも外部講師として研修実施に関わり、JICA の本邦研修経験者も多数含まれている。研修期間は 1 回約 5 週間で毎回 16 人程度が招かれた。

ハイチの農村地域で 2012 年

日本側からの専門家派遣は1名だったため、3ヵ国合同の実施チームを結成し、プロジェクトを進める形をまず作った。実施を担う機関は、ハイチ側は農業天然資源農村開発省、ドミニカ側は ISA 大学、日本側は JICA(派遣専門家)であり、それぞれの機関からの代表がプロジェクトの実施、所属機関への報告や調整業務を担うこととした。ハイチ農業省やドミニカの大学教員にとって、講義や実習の実施と研修コース運営との両方が経験と訓練になり、ハイチ人研修員の能力向上だけでなく、プロジェクト実施チームメンバーへの技術協力にもなっている。

カリブ海の有力国であるドミニカがハイチを支援する南南協力、両国を JICA が結びつけた三角協力はこのように進められた。

3. ドミニカ共和国で研修コースを実施

プロジェクトの 2 本の柱の一つはドミニカでの研修である。ハイチの農業普及員をドミニカに招き、サンティアゴの ISA 大学で5週間の研修に参加してもらう。

主な対象を貧困層の多い中央県で活動する普及員とし、普及活動の実務を評価して選考した。全6回の研修を平均すると結果的に政府機関から 36%、NGO 等民間から 64%の割合となった。男女の比率でみると、女性 18%、男性 82%である。女性参加者を多くという研修を企画する側の意見があるものの、ハイチの普及員は男性が圧倒的に多いためにこうした結果になる。普及員の農業技術と普及能力の向上を図るのが目的であるが、小規模農家の多い山地の土壌劣化が深刻で、砂漠化の進行も見られ、農業基盤が不安定になっているところから、研修課程

で持続可能な農業の視点を特に強調した。

6 回のコースのうち最初の 2 回は飛行機で、それ以降はチャーターバスで陸路を、研修員はサンティアゴまで移動した。ハイチ側の治安が気懸かりであるため安全面に配慮して、夜間ではなく日中の安全な時間帯に動いた。研修コースは、講義、実習、見学、学外研修からなる。ハイチの普及員は非常にまじめではあるが、普及活動のための訓練、教育を必ずしも十分には受けていない。クレオール語とフランス語の両方が公用語であるが、フランス語を母語とするハイチ人は極めて少なく、大方の人が日常的にはクレオール語を使う。研修コースの計画を詰める際に、どの言語で研修をするか議論があったが、フランス語で講義を聞く、議論をする、教材を読解するのは普及員には難しく、また普及活動で使用する言語もクレオール語であるため、クレオール語で実施することにした。他の対ハイチ援助機関はフランス語を使うことが多いようだ。テキストもフランス語で作成する方が専門用語が充実した言語であるためはるかに楽で早い。一方、研修スタッフであるドミニカ人の言語はスペイン語である。クレオール語もフランス語も使えない。運よく、クレオール語とスペイン語とフランス語が分かる複数の通訳が見つかり、これが上手く機能した。普及員はフランス語だと気後れして喋れなくなってしまう。クレオール語で自由に話せる環境を作ることが大事だった。

ISA 大学内講義室にて、アクションプラン発表で他の研修員からの厳しい質問に苦笑　2011 年

グァバの栽培について説明を熱心に聞く研修員　2010 年

ドミニカ人とハイチ人の気質は明らかに異なる。ドミニカ人はラテンアメリカ的な気質で、オープンにはっきりモノを言うが、ハイチ人はどちらかといえば引っ込み思案で我慢強い。ハイチ人同士でも初対面では、なかなか話をしない。研修開始後も容易には打ち解けないが、寝食をともにして過ごすうちに仲良くなれるようで、数週間に及ぶ日程のおかげで、普及員の話し合いから生まれた研修のアイディアなどが提案されるまでになった。

土壌の野外実習帰りに歌をうたって帰路につく研修員　2010 年

ハイチ側もドミニカ側も当初、JICA の技術協力は、調査、計画立案から実施まで、支援事務の一切をすべて日本側がやるものとの思い込みがあったようだ。日本の技術協力はそうではなく、カウンターパート機関とその要員が、日本から派遣された者と二人三脚で実施するのだと繰り返し説明することになった。日本側の私がひとりで進めてしまう方が早いことが多いのだが、それではオーナーシップの意識が育たない。自分たちのプロジェクトと思うようにはならない。私の専門分野である土壌やアクションプラン作成に関する講義やワークショップを受け持つと同

時に、研修コースの組み立てと運営、そしてコーディネーションに多くの時間を費やすこととなった。ハイチ農業の現状と未来を考え、研修の基本方針を策定し、カリキュラム案を提示し、フォローアップの計画や実施をする仕事である。

これまで日本の援助を受ける側にいたドミニカ人スタッフに、日本人とともにハイチを支援しているという自信と誇りが生まれて、次第に先に立ってプロジェクトを進行させるようになった。

4. ハイチでフォローアップ

ハイチからの研修員がドミニカでの研修コースを修了して勤務地へ帰ってから、ドミニカ人と日本人とで研修チームをつくって、ハイチの山間地で小規模農家を対象に農業普及の仕事をする“旧”研修員を訪ねた。プロジェクトのもう一つの柱、フォローアップである。

研修の終わりが縁の切れ目ではなく、フォローアップで再会すれば、“旧”研修員が自立発展的に実施している普及業務に追加の技術アドバイスを求められたり、資金や資材の入手方法、組織的活動のやり方の相談を受けたりする。そこで支援になるようなことができて関係の継続を確認できればというのがねらいであった。研修コースで野菜や樹木の苗作りを学び、以前はなかった育苗施設を作り、“旧”研修員が自主的に開いたワークショップにフォローアップチームが参加したことがある。NGO の普及員で、日本での研修も経験した“旧”研修員が、持っている技術を活用しようと木酢作りを教え始めたことをフォローアップで知ったこともある。

家の手伝いをする子どもたち 2011 年

フォローアップの回数は 12 回だった。陸路では治安が懸念され、はじめの何回かは空路でハイチの首都を経由して旅をせざるを得なかったが、途中（2012 年）からは陸路でドミニカから直接ハイチの山岳地帯にある中央県を訪ねた。移動に首都を通らずに済むのは助かった。2010 年のハイチ地震後、街のあちこちに瓦礫がずっと残っていたし、2012 年までは公園という公園、空地という空地はほとんどテントで埋まっていた。そもそも外国人がうっかり一人で歩ける町ではなかった。

比較的豊かな農家にある高床式倉庫 2012 年

山間の農村部では全く異なるたたずまいのハイチに出会う。治安がよく住民が素朴である。盗む物がないし、盗ってもどこの誰の仕業かすぐにわかる。電気や水道が通じていない家が多く、農家は 5～6 人の小人数の家族で零細な農業を営む。若いうちに都市部で現金収入を得たほうがいいと考えるのか、男女とも都市部や隣国に働きに出たり、稀に勉学を続けたりする。結婚前の女性が 20 代前半で子どもを産む例が多く、その子どもを父母に預けて都会へ出る。営農は残ったおじいさんとおばあさんとその孫が細々と続けることになる。自家消費分の食料の確保が精一杯で、余剰作物を売る段階までは容易に届かない。薪炭材あるいは用材として木を切り続け、

植林が伴わず、乾季になると草も生えない状況になっている。ヤギの放牧が野放図に広がり、放し飼いのヤギは何でも食べてしまうので、木の皮を剥がして枯らし、傾斜地の植生を薄くし、農地の土壌劣化が進行する一因になっている。これでは持続可能な農業は成り立たない。

フォローアップではいつも修道院に宿泊した。山岳地帯の農村にホテルらしいホテルはなかった。トイレは水洗だったが、井戸水や溜めた雨水を使っていた。町まで出れば、ペットボトルの水を買え、電気があり、車で移動ができる。現金をほとんど必要としない農村の庶民の暮らしと都市部の住民や外国人の生活に、技術協力が目指すところへの距離の大きさを感じ、ハイチを訪ねるたびに違和感を持った。

家の手伝いをする子どもたち　2012 年

5. 1つの島の2つの国で3年を過ごして

ドミニカでの研修コースとハイチへのフォローアップを繰り返すうちに、ハイチ人とドミニカ人の関係が、少なくともプロジェクト関係者の研修員と研修指導者の間では、だんだん改善されていったことは嬉しいことであった。ドミニカ人の研修指導者とともにハイチを訪ねるたびに、“旧”研修員の対応がよくなり、食事やビールを用意して自宅に招いて大歓迎してくれたり、自ら焼いたケーキを持たせてくれたりといった、ハイチ人らしい素朴であたたかなもてなしを受けた。大概のドミニカ人はハイチへは行きたがらない。行ったことのある人にはめったに会わない。試しに街で聞いても、ほとんどのドミニカ人はハイチへは行きたくないと答える。フォローアップを計画した時、研修指導者であるISA 大学の先生が一緒にハイチへ行ってくれるか不安があった。日本人一人だけでフォローアップを実施するのでは、三ヵ国で協力していることにはならない。ドミニカ人の研修指導者が一緒に現場に行かないと格好がつかない。隣の国なのに関心を向けてこなかったドミニカ人が、遠い日本からきた者のハイチに対する姿勢に影響されたのか、理解してくれるようになり、段々に積極的に出かけるようになった。変わるようすが興味深かった。

ドミニカの農家の説明を熱心に聞く研修員　2011 年

ドミニカ人のハイチ観形成には歴史的な背景があって、両国間の交流が円滑になるにはまだまだ時間がかかると思われる。出稼ぎのハイチ人が主に肉体労働に就くせいか、ドミニカ人のハイチ人への視線は好ましいものではない。経済格差が広がるばかりであることが影響しているのだろうが、このようになったのは、教育のあり方にも問題があると思う。労働者から大統領までみんなが一つの言語を話し、教育がスペイン語だけで為されるドミニカと、国民の大部分はフランス語が身についていないのに教育がフランス語で為され、エリートだけがフランス語を使うハイチの違いである。庶民の教育が低いレベルに留め置かれている。為政者および行政と民衆との間でコミュニケーションが成立していないと見えることがある。ハイチでデモに遭遇したことがあった。プラカードなどで政治的あるいは行政上の要求をアピールするデモとは異なり、プラカードも言葉を連ねた紙や板も持たず、電気を、水道を引いてくれと太鼓を敲いたり、葉っぱを持って戦いの

未舗装の道路が多いハイチの地方で、乗り合いトラックが砂埃を上げて走る 2011 年

踊りをしながら何かを叫んで練り歩くといった感じだった。読み書きのできない人が多いからである。本来のデモにならないのも普通教育が普及していないためではないかと思う。

こうした経済、教育、技術、生活水準にあるところで技術協力プロジェクトを実施する時、農業生産技術の向上と人材育成を通じた小規模農家の農産物生産高の増大を目標に掲げても、数年の時間的制限の中で達成するには困難が大きい。収量増大、売れる新作物の紹介、販売網の開拓などについて時日をかけて一定レベルに引き上げることができても、農業生産条件のより良い地域とは競争にならず、追いつけないために容易に貧困から抜け出せない。山岳地帯の零細営農でようやく自給食料生産ができるかという地域では、そうした条件に適う豊かさとは何かというより長い視点から検討を加え、手の届きそうな目標を立て、実施方法を柔軟にすることで、意義深いプロジェクトを実施できると思う。

ハイチの農村地域で見かけた携帯電話のソーラー充電ステーション 2012 年

3 年のプロジェクトを終えて、ハイチ側とドミニカ側のプロジェクト関係者と研修指導者の横のつながりが強化されたことや、研修修了者がハイチに帰任後、修了者同士で協力し合って自発的なセミナーを開催していることなどは、想定していなかった望外の成果である。（ハイチで 2010 年 10 月から 3 年間、JICA 技術協力プロジェクトの業務に従事した木村剛さんに広報部がインタビューし、取りまとめました。）